

巻頭の言葉

岩本 武和

私が京大に着任して4年が経過しました。今年卒業する2期生の諸君が入学した同じ年に、私もこの大学に少しばかり心躍らせて戻ってきました。本当は今もっと颯爽としていなければいけない時なのでしょうけれど、思うに任せず、目の前の蠅を追うことすらできない日々を過ごしています。君たちの前では、もっとカッコよくありたかったのだけれども、40歳を前にして未だ貫禄などという言葉からは最も遠い先生だったことと思います。

2年間の東京出張がようやくこの3月でお役御免となると思ったら、昨年10月より国際経済学会の本部事務局を引き受ける羽目になり、なかなか研究活動に専念できません。「ケインズと戦後国際経済秩序」というテーマで書き続けているのですが、遅々として進まず忸怩たる思いです。あと2～3本書けば仕上がるはずですが、学位申請と在外研究を早く済ませて、少し肩の荷を降ろしたい気分です。40歳までにこれらをやり終える予定でしたが、人生思い通りには行かないもので、一度ズレるとそのズレがどんどん拡散して均衡点には戻らない、というのが最近の「複雑系の経済学」のエッセンスだそうです。共感することしきりです。

この4年間で私が唯一自信を持って言えることは、素晴らしいゼミ生達に恵まれたこと。有能なTAの力に助けられたことも大いに感謝する次第です。でも、コンパの席上でも何度か申しましたが、全てに全力で投球することはできないけれど、このゼミだけは手を抜くことはしなかった、と今でも自信を持って言うことを、君たちに許してもらいたいと思います。特に、今年の卒業生達に対しては、2回生から3年間つきあった最初の学年なので、これから何人の卒業生が巣立つかはわかりませんが、その土台になってもらいたいという思いもあり、一生懸命取り組んだつもりです。

卒業おめでとう。二十四の瞳を記憶に止めておきます。谷口君、偉大な第2代ゼミ長でした。君の3年間の成長ぶりは目を見張るものがあります。この機関誌に先生の論文も載せろ、という提言は、成長した君らしい厳しいチェックでした。住銀がいやになったら、いつでも面倒見るよ。藤原君、谷口とは全く違うキャラクターでゼミでは不可欠の存在感を示してくれました。ひっきりなしにかかる＝かける携帯電話に象徴される一種の嫌みは、今後の君の敵と味方を明確に分ける線となることでしょう。徳田君、君も谷口や藤原に一步もひけをとらない雄弁家でした。彼ら以上に早くから外に目が向いていたことは最初から君の特質でした。初志貫徹し、国際人として活躍する姿を期待しています。岡見君、ここまでつきあってきたのに、帰国組の君が最後にゼミ論を提出しなかったのは心残りです。間瀬君という有能な人材が志望変更の理由で離れて、このゼミで「四人組」が維持できな

かったことも残念でした。山本君、山岡壮八の『徳川家康』が愛読書というゼミ面接での印象が強烈だったせい、君は最も典型的な文系人間と思っています。ゼミ論執筆過程で一番私に電話をかけてきた熱心さを、今後難しい課題が山積している公取の場でも生かして下さい。峯村君、T Aの高橋の小姑の発言からは全くフリーな目で君を見ていました。礼儀正しく、人当たりも良いが、日本国のトップ官僚として、小さくまとまらず、思想的にも深く大きなスケールをもってザッへに仕えて下さい。君たちと仲の良かった清水が最後まで全うできなかったことも心残りですし、圭吾は、根本から心を入れ替えて甘んじられたいはいけません。中西君、君の有能ぶりは今年のインゼミで見直しました。あれだけの統率力があるのだから、一見何を考えているか分からない、という風評は変える必要があります。フレッシュな会社でこそ、君がなくてはならない存在になることを大いに期待しています。中野屋君、アイセッカーかつプロのレーザーかつ通産省内定+試験落ちかつ工学部大学院進学という異色中の異色の才能、私の研究室のインターネットでサンタフェ研究所からワーキング・ペーパーを取り寄せる姿に、今後の君の計り知れぬ未来を空恐ろしく感じました。片岡君、君とは私の高校の後輩ということで関係が始まりました。要領よく生きることだけが全てではなく、私のように不器用に遠回りをすることも若いときの特権です。

ところで、昨年卒業した1期生の加藤、木村、石井の3氏に一言。加藤君、もうすぐお父さんですね。ペルー情勢、気にしています。木村君、竹橋のOECFのすぐ横に宿をとる場合も多いので、東京出張の折にはおつき合い下さい。石井君、君が一番近くにいるのだから、たまには後輩達に先輩面して会いに来て下さい。みなさんの今後の財政的支援をお願いいたします。OB会でお目にかかれるのを心待ちにしています。

3期生、4期生の諸君にも書いておきたいこともあります。それは来年度ということにして、とりあえずこの『岩本ゼミ機関誌第1号』刊行の経緯について記録しておきます。もともと、4回生のゼミ論を纏めるということから出発しましたが、卒業生も含め名簿を完備したOB会会報も兼ねたい、インゼミを含めた1年間の活動報告も載せたい、しかも私やT Aの最近の研究論文も載せる、という方向に発展しました。卒業生の皆さんには重ねて財政的支援をお願いする一方で、カネの切れ目が縁の切れ目ではないが、在校生は、積立金を払っていくことを心がけて下さい。本来は会計報告をキチンとすべきですが、初年度0から出発しますので、次号には必ず載せます。「前期はテキスト、後期はインゼミ、4回生はゼミ論を書いて、最後に機関誌を纏める」これが岩本ゼミの1年間のタイムテーブルです。試行錯誤の4年間が過ぎてようやく形が整いつつあるようです。

来年も第2号が続けて発刊されることを念じつつ筆を置きます。

1997年2月17日